

五大院安然の法身說法思想

大久保良峻

現今、法身說法と言えば、空海すなわち真言宗（東密）の独擅場であるが如く言われることがある。しかし、法身、或いは自受用身の說法ということは中国仏教でも種々に論ぜられて来たのであり、日本天台では中国天台の教説を踏まえた上で独自の理論を展開しているのである。そこで、以下に、安然が天台教學をどのように採択しているかということを検討しつつ、安然の言う法身說法の意味について述べることにしたい。

安然にとって、仏身を三身、或いは四身等と分別するとしてもそれらは一体なのであるが、教時間答卷三^①で、法華文句記卷九下の、「故存三身、法定不^レ説、報通二^二義、応化定説。若其相即、俱説、俱不^レ説。」という天台の即の三身を否定しながらも、円密一致の義として天台における「三身俱体俱用」の義を挙げていることは知られている。ここで、即の三身を否定したことは大変な注目に値するが、天台教學を取捨していることにも留意しなければならないであろう。

五大院安然の法身說法思想（大久保）

さて、このような見地に立脚すれば、全ての仏の說法が法身の說法に外ならないことになってくるが、安然の法身說法思想は単にそのみに止まるものではないのである。すなわち、次に示す菩提心義抄卷三の記述が注目されることになる。

問。……天台云……又総判云、若存三身、法定不^レ説、報通二義、^②應化定説。若即三身、俱説、俱不^レ説云云。報通二^二義^一者、自受不^レ説、他受定説云云。今真言宗、中胎華臺、^③唯有三^二八葉^一、法身・自受皆亦說法。与^レ彼何会。

答。……今真言宗所用、若与論^レ之、天台・華嚴円頓教義。若奪論^レ之、非^二前四教・五教所用^一。此是、事理俱密金剛乘義。故与^レ彼異。然中臺上雖^レ有^二三^二八葉^一、八葉之下亦有不可説葉。法身・自受雖^レ俱說法、不^レ同^二前宗他受・變化所^レ説言音^一。天台亦云、法身無^レ説、冥實^二一切^一。楞伽亦云、法身放^レ光、常照^二一切^一云云。今宗法身・自受実以^二一切衆生国土万法^一為^レ体。一切諸法即彼說法。一切諸仏俱以^二一切衆生国土^一、雖^レ為^レ法身三密・自受用身自受法

案之法具^二、而衆生不知、於^レ中迷惑。故円覺經云、普賢汝當知、一切諸衆生、無始幻無明、皆從^三諸如來円覺心建立^云云。

この問答では、真言宗が法身・自受用身の説法を言い、それが余宗の他受用身・變化身の言音と異なることを述べているのである。先ず、問中には前引した文句記の文が引かれ、そして、答中において与奪二論を設けることにより、与論せば真言と天台・華嚴の円頓教義は同じであるとしても、奪論せば天台の四教（藏通別円）や華嚴の五教（小始終頓円）とは異なることを言う。

さて、この答中で注目しなければならないのは、「天台亦云、法身無説、冥資^二一切。」という記述である。清水谷恭順氏は、この文や、それに続く「楞伽亦云……」という文に對して、「……共に法身に活動ある事を示すけれども「未だ法身に説法あり」とは説かない。」と述べられているが、果してその解釈は妥当であろうか。というのは、文脈からもそうであるが、「冥資^二一切」という法身の活動性そのものに法身説法の意義を認めているように考えられ、更にはこの文が次に示す浄名疏の文を想起させるからである。すなわち、維摩經文疏卷一には、「……法身即法界、常普冥資^二一切衆生^一、即是法身説法也。」とあり、同略疏卷一には、「……法身無縁、冥資^二一切。無説而説、即是法身説法。」とある。而して、心義抄所引の「法身無説、冥資^二一切。」という文を安

然が尊重していたことは、教時間答卷二に、「大日如來、一切法為^二自体^一故。凡有^三仏事^一、皆撰^二大日所為之中^一。天台宗云、法身無説、無^レ示、冥資^二一切^一、即此義也。」と記されていることにも明らかであろう。ここに「天台宗云」として引かれる文は心義抄の引文に符合するのであり、「大日如來、一切法為^二自体^一」という文も、心義抄の「法身・自受実以^二一切衆生国土万法^一為^レ体。……」という記述と同じ概念を示している。

これらのことにより、安然是文句記の教説に對しては否定的であるとしても、浄名疏の教説によって円密一致の法身説法思想を打ち出していることが窺えるであろう。尚、「楞伽亦云……」という文も法身説法の義を明かすものとしての引用とみるべきであるが、楞伽經については他の問題もあり、今は略すことにしたい。

さて、次には安然の言う法身説法の意義について考えなければならない。右に見た如く、安然にとって法身の説法とは一切諸法そのものに外ならないのであり、法身の活動が遍在していることが重要なのである。従って、法身のみを他の仏身と區別して採り上げその説法を殊更に強調する必要もなく、かつまた言音のみに拘泥する必要もないのである。このことについては、例えば、教時間答卷二に、「故知。飛華、落葉、割木、列猿、並は無^レ非^二大日如來自然造化之功^一。……

是故、諸宗学徒、若見^三美華、不^レ念^三本尊、蓋是不修之甚。若聞^三冷風、不^レ觀^三內身、亦是觀行之闕^云。」と記されていることが参照されるであらう。

また、安然が空海義を批判しつつもそれを摂取したことは知られているが、今の問題については、「五大皆有^レ響、十界具^レ言語、六塵悉文字、法身是^レ真相」という頌で知られる声字実相義（文字実相義）の影響を忘れることはできない。すなわち、教時間答卷三には、「五大響当^レ体、是真言也。故真言人、直聞^三風声・水音、即知^三是法身声、亦能悟^三入阿字本不生理。若^レ其^レ不^レ知^三此義、則非頓悟之機。雖^レ聞^三仏音（声）、於^レ彼無^レ益。」とあり、同卷四でも声字義の濃密な影響が見て取れるのである。そして、このことは、大・三・法・羯という四種曼荼羅身說法の義との関連において論及され、必ずしも音声によらざる説法も、大・三・法曼荼羅身に約しての説明が為されているのである。そこには、空海義への傾倒ばかりでなく、安然独自の見識による新たな展開が見られることに注意が払われねばならないであらう。

1 大正七五・四二〇頁上中。

2 清水谷恭順氏は『天台密教の成立に関する研究』（三〇二頁）で、十不二門の「三千並常俱体俱用」という記述を挙げられるが、三身に約した「俱体俱用」の語の初出を最澄の守護国界章に求められている。しかし、十不二門は玄義釈籤を別行した

五大院安然の法身說法思想（大久保）

ものであり、釈籤卷一四（大正三三・九一九頁上による）では「三身並常俱体俱用」となっている。そして、「三千」と「三身」のどちらを正義とするかということが趙宋天台でも問題になっているのであり（平了照著『和訳十不二門指要鈔』一八三頁参照）、最澄が「三身」となっている釈籤に基づいたことは十分に考えられよう。

3 円珍の金光明文句は現在伝わらないが、実範の大經要義鈔卷七には、「智証金光明經文句四云、法身常住、二身無常。法定不^レ説、報通^三二義、応化定説。此約^三別教。若相即門三身、俱常、俱無常、俱説法、俱不^レ可^三説法云云。」と引かれ、この記では文句記の三身各別の説明は別教義と為すも、即の三身については否定的な見解を示していない。

4 清水谷前掲書三〇二頁。

5 中国天台の教説からいけば、文句記の文と浄名疏の文は当然一具に考えるべきである。すなわち、智円の維摩經略疏垂裕記卷一には、「法身冥實等者、毘盧遍攝故曰^三冥實。即此冥實名為説法。復次應^レ知、応身説処即法身説。吾今此身即是法身。釈迦牟尼名^三毘盧遮那、故云^三無説而説。」と記され、同卷二には、「三身明^レ之、応身能説、法定無^レ説、報通^三二義。自受用報、同^レ法無^レ説。他受用報、同^レ應有^レ説。応即法故、説即無説。法即応故、無説即説。」と記されている。要するに、即の三身義が基盤となっているのであり、その範疇で浄名疏の教説も解釈されているのである。

（早稲田大学大学院）